

老若男女共同参画社会の子育てを見通す(3)

—共感でつながる街づくり—

映画「えんとこ」の

市内全保育園での連続上映会を中心に

金田 利子

北山 晃

はじめに

子育てはみんなの課題であり、老若男女とも、わが子がいてもいなくても、子育てに関係のない人はいないということ、そしてそういう係わりの中でこそ、人々が人間らしく生きられる新たな社会づくりにつな

がるということ、この連載の第一回で述べた。第二回においては、その事例の一つとして、公園を出会いの場にしていく札幌での取り組みについてとりあげた。

今回は、街ぐるみで、ある感動的な映画を、保育園等を会場に市内のさまざまな地域で連続上映し、子育

での基礎とも言える共感性の根っ子を老若男女が共有しているという取り組みについてとりあげたい。

これは、静岡県焼津市の保育園協会（公立私立の全十二園が参加）が中心になって行なった共感でつながる街づくりへの、小さな街・焼津市（人口は約十二万人）での大きな「実験」とも言える。

この実験については、その契機をつくった、焼津市なかよし保育園園長の北山晃氏に報告していただく。

一人の感動をみんなのものに

昨年、五月保育学会が青山学院で開催される前日、友人から「立教大学で伊勢真一監督の『えんとこ』の試写会がある」との連絡をもらった。一泊はやめて上京し立ち寄った。見おわった私はものすごい感動を覚えた。しかし、けっして涙の出るような感動ではなかった。生きぬくことの大切さ、「だって、君はひとりで勝手に何かやっていくことなんか出来ないんだろう！」の主人公の言葉に人を信じることのすごさに身

が引き締まった覚えがした。

ここで、少しドキュメンタリー映画「えんとこ」について説明しておこう。

「えんとこ」は、ねたきりの障害者遠藤滋さんのいるところ“と”縁のあるところ“を合わせている。遠藤さんは、脳性マヒに脊髄の神経管障害で五体不満足である。それでも、立教大学を卒業して養護学校の教壇に十二年間立った。しかし、症状が重度化してねたきりの姿を余儀なくされた。最初は足でワープロを打ち、介助者（ボランティア）を求めた。立教大学の学生を中心にして年間一千にもなる人たちが遠藤さんの介助に参加した。しかも、一日三交代の介助である。一回の食事が終わるのに六時間もかかるといふ。遠藤さんも介助者に決して無理な要求をしない。ありのままの姿をさらけ出して介助してもらう。

この関わりは若者たちにとって遠藤さんは、「遠藤さんの所にいるときが一番幸せ」「だって、真剣に僕の意見を聴いてくれる唯ひとりの人」という存在に変

わって来た。中国から医療の勉強にきている留学生は、卒業していく前にと、介助しながらこう語っている。昨年の大晦日の日だった。「私にとって、遠藤さんは日本語の先生です。日本語だけじゃなくって人生のですね。病気があっても偉い人だと思います。遠藤さんからいろんなことを学びました。人として自分の能力を利用して、他の人を助けること、これは幸せだと思います。今度の介助でも遠藤さんに何か助けられることがあつたら、気持ちがいい」と。ちょうど、一九九九年を迎える除夜の鐘がテレビから流れていた。

遠藤さんは清水市の出身で海が好きだ。介助者数人の援助で西伊豆の海に行く。深みに向かって介助者と進んで行く遠藤さんの足はしっかり海底につき自分の足であるきはじめている。感動的なシーンである。伊勢監督が三年間かかってとりつづけた決して気負いのない記録映画である。

さて、話をもどそう。この感動は決して私一人のものにしてはいけない。みんなで分かち合いたい思いが

私の心の中で燃えさかっていた。そして、焼津市民が温もりのある心で手をつなぎあえる日をつくりたい願いにかられた。

全保育園・市内全域で上映計画へ

—小さな街での大きな「実験」—

そこで、さつそく、焼津市保育園協会の理事会を開きこの映画の上映を検討した。後に触れるが、焼津市には公私立十二の保育園があり焼津市保育園協会がつけられ、様々な活動が取り組まれている。この中の一つに、各保育園の主任保育者を中心にした研修部会がある。まず、このメンバーで、横浜市泉区の泉公会堂での上映会に参加することにした。この公会堂の隣の区役所の中では、ドキュメンタリー映画「奈緒ちゃん」のお母さんが、障害者と一緒に喫茶「てん」を経営している。この映画は同じ伊勢監督が二十年かけて撮ったものであり、すでに焼津でも上映していた。

さらに、さまざまな人たちに見てもらえるように、

焼津市教育委員会、焼津市福祉・保健部にも呼びかけたところ快く参加を決めてくれたためバス一台で出掛けた。幸い、昨年「奈緒ちゃん」の上映時にお母さんの講演もあったので、親しみを持ちながらの横浜行きとなった。

帰りのバスの中で話し合い、理事会でも話し合っただ。この映画の上映会を焼津でもやろうということになった。その際、この映画は、「文化センターのような広い会場に多くの人をあつめて一回だけという方法」ではなくて、保育園のホールにゴザを敷いて保護者の皆さんも、近所の皆さんも、一緒になって見よう。」そして「十二の保育園がそれぞれの地元で上映することにして。そうすることは市内全域でやることになる。」

「人と人とのふれあい、障害者（児）も健常者（児）も共に生きていく大切さを考える機会にしよう。」「虐待やいじめ等子どもを取り巻く環境は決してよくないが、この映画から命の尊さを学びあおう。」等の意見から、全保育園で上映しようということになった。

上映日程は、十月から二〇〇〇年の二月まで五カ月間で、各十二園の主催で九会場（一部は共同主催）にわたる。時間は平日は十九時から、土曜日は午前あるいは午後とし、保護者や市民の方々は自分の好きな時間帯を選択できるよう考慮した。

感動の輪が広がった―「実験」の結果―

各園の会場には、一〇〇から一五〇人が集まってきた。なかよし保育園の場合で言えば、きょうだいもいるので九十人定員の園で、七十九世帯いるところ、五十八世帯・六十五人が参加し、高校生や近所の人、市議員等九十名ほどが集まった。

会場では、アンケートを配布、地域の人にはその場で、在園児の家族には園へということをお願いした。現在もまだ、上映途中で



あるが、アンケートの回収率はかなりよく、自主的にあとから園に届けてくれる人も続いている。現在はそれぞれの園で集めており、全体をまとめてはいないので、手元にあるものなから世代ごとにくつかりとりあげておきたい。

*

▼ たった一つの人生だから行けるとこまでいきたいという心がけを持ったえんどうさんをすばらしく思います。(十歳・男児・小学生)

▼ 私は、いまだかつてこのような映画は観たことが無かったので、強いショックを受けました。観ているうちに遠藤さんが知っている人のように思えて不思議な気持ちになりました。(十六歳・女性・高校生)

▼ 「障害を持って生まれてきたことに意味があり、障害を持って生まれたことで人を幸せに出来る。そんな考え方が出来ることに感動しました。胸にぐっとくるものがありました。私も自分の生きていることに自信を持ち、人に支えられながら、また、支えながら生

きていきたいと思います。(十六歳・女性・高校生)

▼ 今まで味わったことのない感動を味わうことが出来ました。(十七歳・男性・高校生)

▼ ボランティア青年の瞳が輝いていてとても印象的でした。生きることは人に支えられるという意味が少しわかった気がします。(二十歳・女性・学生)

▼ ……前略……、はじめに映画が始まって、遠藤さんの顔が映ったときには自分の顔も固く力が入ってしまふほどでした。でも、見ているうちにそれが普通になつてきて障害者としてではなく普通の人として見ているのです。もし、私も「えんとこ」の一人として遠藤さんに接することができていたなら、自分の生き方について、他の人との接し方について、障害を持った方の気持ちになつたりと、いろいろな面で教わつただでしようね。そんな遠藤さんはやっぱり先生であり、皆に勇気を与えてくれるすばらしい生き方をしていく方なんです。ビデオ化されたら私の母にも見せたいものです。(二十九歳・女性・トリマー)

▼……前略……「えんとこ」のみなさんと製作のみなさんの一生懸命さがズンズン伝わってきてしまいましたが。私が個人的に毎年決めている自選の最優秀作品賞の今年の最終選考作品に決まりました。(三十二歳・男性・自由業)

▼遠藤さんという人は人間というより、命そのものだと思います。人をひきつけるパワーがあります。ありのままの“命”をさらけ出して生きて生かされる人生の道しるべのような気がします。「無理しなくていいんだよ。自分一人では生きていられない、誰かに支えてもらわなくては生きられないんだよ」と。

日々時間に追われ、自分中心でものごとが回っているかのように錯覚してしまうそんな私を考えさせてくれました。……後略……。(三十七歳・女性・パート)

▼当たり前前かが当たり前にならない時代だから、当たり前前に生きていこうと再び思いました。かなしくはなかったです。時間ができれば、遠藤さんのような昔の友人に会いに行こうと思いました。(四十八

歳・男性・福祉施設職員)

▼私も障害児を持つ父親であり、また地区リーダーとして活動致しております。しかし、反省としてまだまだやるべきことがあるように思います。足を地に付けて頑張ろうと思いました。……後略……。(五十六歳・男性・障害者育成関係役員)

▼(遠藤さんの発言は聞き取りにくくても字幕なく)本人の言葉なので素直に理解し合えると思います。地域福祉教育にもメッセージを伝えるためによい映画でした……中略……ネーミングもユーモアがあつて記憶に残る。謝辞略。(六十三歳・女性・主婦)

*

「実験」の結果、以上のように、多くの人の感動が集まってきた。感動は一人ですまっておくものではない。一人でも多くの人に会場に足を運んでほしい。そうなるようにするのが先に見た人の仕事でもある。

今の時代、幼・保や福祉・教育機関は地域での子育てを含む福祉の、文化の、発信基地の役割を担ってい

ると同時に、地域で埋もれているお父さんお母さん、おじいちゃんおばあちゃんたちを励まし、社会資源として表に出てきてもらう役割を担っていると考える。

焼津市保育園協会と同保護者会連合会等のこと

今回以上のような取り組みを可能にした焼津市保育園協会と同保護者会連合会等のことについて、少しだけ紹介させて頂きたい。

焼津市に焼津保育園協会が誕生したのは、ちょうど二十年前になる。当然、公私立全保育園が加盟している。「焼津の子どもたちの幸せは、焼津の子どもにかわる専門機関の手で守ろう」と願って結成された。

まず、すべての園の子どもを見る視点を一致させようとして様々な取り組みが行なわれてきた。平成十一年度の取り組みでは、東大の汐見稔幸先生に二回きて頂き、五月に「これからの保育園・保育者のありかた」について問題提起してもらい、九月の秋の研修までに焼津市の全保育者にさまざまな実践をしてレポー

トを提出してもらい、

汐見先生に読んで頂き

改めて講演会を開いて

いる。また、保育園の

世界からだけ子どもを

見るのではなく、とくに

障害児の保育について

は、焼津市立病院小児科・言語治療室・保健セン

ター・静岡県立盲学校・さらには大学の研究者にも加

わって頂きケース検討を行なってきた。したがっ

て、どこの保育園でも「手のかかる」子どもを保育で

きるし、子どもへの働きかけ、親への相談も科学的で

ロマンを持って進めることが出来る。こうした力が車

椅子でも普通学級に入学できる条件を切り開いてき

た。

焼津市保育園保護者会連合会が結成されたのは十五年前になる。「保護者は保育の傍観者であってはならない。」「積極的に参加しよう。」全園の保護者会（父



母の会)加盟で積極的な活動を行い、お互いの園の行事なども公開し、話し合っている。特に年二回大きな行事を焼津市・同保育園協会と共催で開いてきた。一つは毎年欠かさず一般市民を対象に、「子育て講演会」を行っていることである。昨年度は、大阪教育大学の秋葉英則先生をお招きしての講演会、今年度は「映画エンジェルがとんだ日と山田火砂子さんのお話」が企画されている。

もう一回は、毎年三月に行なう「焼津の海を美しく、親子ふれあいクリーン作戦」の取り組みである。家族ぐるみで、日曜日に海岸に集まり清掃活動を行なうが、参加者は一五〇〇人をこしている。ここでも、保育を語る大人同士の知り合いが増えている。

こうして、焼津市保育園協会と焼津市保育園保護者会連合会が車の両輪となって活動してきたからこそ、すんなりと映画「えんとこ」をどの保育園でも正面から受けとめられる視点が一致してくるのである。

さらに、市の子育て支援の関連では十月五日に「焼

津市子ども虐待防止ネットワーク」が立ち上げられた。これには、保育園協会も、保護者会連合会もその構成メンバーであるが、焼津市の子どもや、司法に関する個人や団体が結集している。この会には幼稚園協会々長も、率先して参加している。そして、全員ボランティア参加であることを確認した。(以上北山)

「小さな街の大きな実験」に学ぶ

今回の全園での映画会へのとりくみの特長は、第一に一人の園長・保育園協会理事の発案が受けとめられ、全十二園の各保育園が主催して、小さい子どもがいる人のための臨時保育つきで、保育園やその近所の会場で上映会を開いたところにある。これによって、全地域に保育園児の保護者だけでなく、老若男女が誰でも立ち寄れるようになり、保育園が(ということはずいぶん)子どもとその保育ということが)住民の身近な場・課題となる契機がつくられた。事実、感想文にもあるように、その園の卒園児やその友達など小学生から高校

生・大学生も見にきており、親の世代はもちろん祖父の世代も参加している。また、十二園九会場で日時を変えて行なわれるため、都合のいい時間帯で見られる。大きなセンターなどは異なり、保育という課題を挟んで、互いに親近感を持って鑑賞できるという、生きたコミュニケーションの場になったことだ。

第二の特長は、表面ではなく内面で、子育ての基礎とも言える共感で地域をつなげようと試みたことにある。感動を分かち合いたいという願いからの出発である。その内容については、同じように感動する人、批判的な人、いろいろあっている。そういう思いを世代を越えて語り合える共通の「鏡」が出来ることがすばらしい。要は実務の相談の寄り合いでもなく、年間計画のなかにはじめから入っている計画された講演会や映写会ではなく、まさに、一人の人の共感を分かち合いたいという願いを広げたという、共感性で地域を結ぶという点にある。人と人との交流には自分の要求を通すための「脅し」や、対等とは言っても貸し借

りの清算的なやりとり・駆け引き・ギブアンドテイク的なものが多く、共感で係わる面が薄れてきている。これがなければ、地域建設にどんなにお金がかけても形だけになってしまう。共感を媒介にした交流は、地域の人々が意思疎通できる土台づくりにつながっていくのではないかと思う。

第三の特長は、第二の特長とも係わるが、「無計画の計画」という点にある。保育のカリキュラムとも係わる。カリキュラム（保育計画）は必要であり、無くてはならない。しかし、それのみ忠実であると、目の前の子どもへの感動に注目しそれに応え、仲間に分かち合っていくことを飛ばしかねない。かりに来年の計画に入れるとしても、もうその時は血の通わないものになってしまう。共感でつながる地域づくりにおいても同じなのではないだろうか。

この場合は、「一人の感動から」の一人が焼津保育園協会の前会長で現理事ということであるが、そうでなくとも、一保育者あるいは保護者のさらには焼津

市民の誰かの感動をつないでいく、手作りの共感コミュニケーションへの道もこの力をもとにやがて開いていくのではないかと期待できる。

第四の特長は、子育てで地域をつなぐ保育園協会と保護者会連合会の果たした役割である。前記のよう
な、「無計画の計画」が実現できたのも、二十年間の
保育園協会等の蓄積があつたからであろう。もちろん、これから共感でつながる街づくりを始めようとする地域はその地域の最も蓄積のある所に着眼し、それぞれの地域の特長を生かしてとりくむなら、二十年かからなければ出来ないわけではない。焼津市の場合には保育園協会と保護者会連合会がその役割を果たしているが、実験にはどこでも拠点となる集団が必要になることは確かだと思われる。

おわりに

「小さな街の大きな実験」はまだ途上で、十二園九会場のうち五会場が終わったところであり、全体でどんな層が何人くらい鑑賞するのか、感想が何通くらいきて、どんな意見に分かれるかなどの総括はまだなされていない。その意味でまだ中間段階にあるが、私は、以上であげた四点からだけでも成功したのではないかと考える。感動は目に見えるものではない。そうした目に見えない意味内容がひとつの街をつないでいる。そう思うと何かワクワクとしたロマンがあり、その街で暮らすことが嬉しくなるだろう。実験の全体総括とさらなる追跡に期待したい。

もう一つの幼児教育機関である幼稚園界もきつと様々な努力をしているであろう。子育ての連帯が進んでいる地域だけに、焼津市保育園協会が、さらに焼津市保育園・幼稚園協会として連携できれば地域からの幼保一元化も夢ではないと願うところである。

その後、焼津市内でこのニュースが広がり、全市議会議員が一堂に会してこの映画を見ることになった。

金田（静岡大学）

北山（焼津市・なかよし保育園）